

気にかけること、声を掛けること。
どこかへつなぐこと。

どんな風に声かけをしたらいいの？

ケアマネジャーが高齢者世帯のケアに伺った際に、ひきこもり状態の子世代に出会う場面があるそうです。そんなとき、『どう声かけをしたらいいかわからない。』というお声をお聞きすることが多いです。

ご家族のお一人として、一般的な挨拶をすること。

ひきこもり状態にあるからといって、特別な人と捉えることはありません。ケアにお伺いしたお宅の家人として、礼節を持ったアプローチを心掛けることが大切です。もしかしたら、返答がないかも知れません。

それは「驚いた。」からであったり、久しぶりのことで「緊張した。」であったり、反応にはそれぞれ理由があります。お会いしたら挨拶をする。何度か繰り返すうちに声が返ってくるかも知れません。根気強く続け、お相手からの反応を待ちましょう。

その方が一人になるときを放っておかない。

ご両親のケアが進み、その方が一人（孤立）になる状況が予測される場合、関係機関と情報を共有しましょう。専門職が行う『一本の電話』が、その方の健康や命の支援につながる場合があります。支援に迷ったら、多職種を頼ることで、新たな方法が見つかったり、連携が始まったり、重層的な支援が可能になります。



西区社会福祉協議会 TEL 025-211-1630
新潟市西区寺尾東3-14-41 西区役所健康センター棟1F

NPO法人 新潟ねっと TEL 025-268-6514
新潟市西区坂井東3-3-29

新潟市障がい者基幹相談支援センター西 TEL 025-264-7468
新潟市西区寺尾東3-14-41 西区役所3F

新潟市地域包括支援センター坂井輪 TEL 025-269-1611
新潟市西区新通4734

新潟市地域包括支援センター五十嵐 TEL 025-378-2255
新潟市西区上新栄町6-17-33

新潟市地域包括支援センター小新・小針 TEL 025-201-1351
新潟市西区小針藤山1-17

新潟市地域包括支援センター黒埼 TEL 025-377-1522
新潟市西区鳥原3255-1 ケアハウスことぶき敷地内

新潟市地域包括支援センター赤塚 TEL 025-264-3377
新潟市西区赤塚4782

西区役所 健康福祉課 TEL 025-264-7315
西区役所 区民生活課 TEL 025-264-7211
西区役所 保護課 TEL 025-264-7320

新潟市パーソナル・サポート・センター
TEL 025-385-6851
新潟市中央区新光町6-2 勤労福祉会館1F

新潟市ひきこもり相談支援センター
TEL 025-278-8585
新潟市中央区東万代町9-1 新潟市万代市民会館5F

支援者同士をつなぎ、サポートするためのネットワーク

8050のご家庭を地域へつなぐ

— 2つの事例から —



8050のご家庭は親世代の生活環境の変化、例えば、入院や介護施設への入所によって劇的に変化をします。それまで親世代から食事や生活費の提供によって成り立っていた50代、60代の子世代はその瞬間から社会的孤立状態になります。

『西区ひきこもりびとミーティング』ではそのようなご家庭と地域社会とのつながりの再構築を実践したいと考えます。そのためには地域の専門職、福祉団体、行政、民生委員、住民との連携は欠かせません。「社会的孤立」状態にある方と地域をつなぎなおす。「孤立」状態にある方一人ひとりとつながり、その方の生活や人生に寄り添うことで『その人らしい生き方』の実現を目指します。

HIKI 西区
ひきこもりびとミーティング
NISHIKU HIKIKOMORIBITO MEETINGS

NPO法人
監修: 新潟ねっと イツモノトコ

発行: 西区社会福祉協議会
2025年2月1日

8050のご家庭を地域へつなぐということ

8050のご家庭の支援は単一の機関だけで対応するのは難しい場合が多くなってきています。高齢の親世代は医療や介護サービスの利用が必要になります。子世代に何らかの障がいがある場合は障がい者手帳の取得や障がい者年金の申請、障がいサービスの利用などが考えられます。また、何の制度も使えない状況もあり得ます。そのような場面ではまさに『多職種連携』による『重層的支援』が求められます。では、その『多職種連携』による『重層的支援』をどのように実現するか。我々支援者がどこに相談したら有機的なつながりを持てるのか。事例を通じてご紹介します。

事例 1

ご家庭で介護を続けてきた妻。体力の限界を迎え、夫の介護施設入所を希望され、ケアマネジャーがお宅へ伺った。何度目かの訪問の際、妻から『実は何もしていない息子がいるの…。』と打ち明けられた。



このケースから見えること

このケースではケアマネジャーが息子さんに話しかけたことからつながりを構築することができました。息子さんも悩んでいたところで声を掛けてもらって「嬉しかった。」と言っていました。このように当事者は『何とかしたいけど、どう行動したらいいかわからない。』『一人では自信がない。』という方がほとんどです。声がけをしてみても、反応を得られない場合もあると思いますが、ご家庭とのつながりが強いケアマネジャーを“味方”と思っている方は少なくないようです。

事例 2

80代の母親と50代、40代の息子との3人暮らし。経済的な困窮と約20年間ひきこもり状態の息子との生活に悩んでいた母親からのSOSを受け、お宅を訪問した。



このケースから見えること

8050家庭のひきこもり当事者の中には、何らかの精神障がい、知的障がいを抱えている方が少なくありません。ただ、これまで障がいサービスを利用してこなかったことなどから、サービスの内容や手続き方法に迷う方がほとんどです。このようなときには障がい分野の専門職に依頼をし、ご本人の権利擁護や適切なサービスへつなぐことが望ましいところです。また、このケースのようにご本人はひきこもり状態から心身的なリカバリーが進んでいることが多く、ご家族からの誘導でスムーズにお会いできることが多いことも特徴と言えます。

8050のご家庭の支援について

ひきこもり状態が長期間続いたことによる『諦め』の中にいる方々が多い印象を受けます。これまでも、「どこかに相談したけど解決できなかった。」「本人と会えなければ支援は無理。」と言われたなど、支援に対して不信感のようなものを抱いているご家庭も見受けられます。また、ひきこもり状態にあるご本人も「自信がない。」「今さら無理。」といった自己肯定感が低下している傾向にあります。支援の方法としてはご本人に対してプレッシャーにならないように、緩やかに接点を持つことが有効です。その接点を支援者側がチームで熟考し、リスクが少ない形で実践に移し、ご本人と信頼関係を築くことが求められます。

